戀

二つを以て罪せられしとぞ、愛憎の變、よく〳〵慎み思はるべく候、

〔類聚名義抄六心〕戀力泉反、コヒ和レン

〔伊呂波字類抄古人事〕戀コヒ　嬌婚イ如レ字亦態也　想　惷　吟　郁已上同

〔同禮疊字〕戀慕

〔書言字考節用集九言辭〕戀慕コヒシタフ

〔八雲御抄三下人事〕戀　かたこひかた思の戀なり　もろ源氏語

〔萬葉集考二〕相聞アヒギコエ　こは相思ふ心を、互に告聞ゆれば、あひぎこえといふ、後の世の歌集に、戀といふにひとし、されど此集には、親子兄弟の相思ふ歌をも、此中に入て、こと廣き也、

〔倭訓栞前編古九〕こひ　戀は人情の切實をいへば、乞求るの儀なるべし、戀々てとも見ゆ、和歌に戀部を立て四季に次つるは、有天地然後有男女の義、我邦天の浮橋のむかしより、諸冊唱和の詞に起りて、造端於夫婦の敎を設けり、此戀の情實を失はゞ、忠孝も本づく所なく、禮儀も錯く所あらじ、俊成卿、

戀せずば人はこゝろもなからまし物のあはれは是よりぞしる、此歌古今集、流れては妹背の山の歌によりてよめりと、豐筑後守の傳なり、万葉集には戀の部を相聞と載て、妹背のなからひのみならず、兄弟朋友のみやびをかはすまでを入られたれば、五倫にわたりてこゝろ得べきことにや、小倉百首に、

わすらるゝ身をばをもはず誓ひてし人のいのちのをしくも有かな、此道理を忠孝に移し看ば、臣子の身として、君父の不是底をかへり見るに、いとまなき意旨を理會し得べし、拾遺集人丸、

住よしの岸にむかへるあはぢ島あはれと君をいはぬ日ぞなき、戀部に入たれど、いさゝかも妹背のなかの心はなし、君は天皇をまうし奉りて、至忠の詠なりといへり、されど男女の間淫風に奔り、猥に流れ行て歸る道しらざるは、大に戒むべし、

〔古事記上〕此八千矛神將婚高志國之沼河比賣幸行之時、到其沼河比賣之家歌曰、夜知富許能、迦微